ありがとうに　　こめられたおもい

たくさんのおもいがつまった　くも合せん

「おじいちゃん、くも合せん見せてくれてありがとう。」
今日、保ぞん会の方々が学校にくも合せんのことを教えに来てくれた。実さいにくものたたかいも見せてくれた。ぼくのおじいちゃんは、くも合せんの保ぞん会の仕ごとをしている。保ぞん会とは、伝とうあるくも合せんを守り伝えていくために仕ごとをしている会らしい。ぼくはくも合せんに出場したことがあったが、勝てたことはほとんどなかった。だから、今年は出なくてもいいかなとも思っていた。でも、きのうの夕食の時におじいちゃんがくも合せんのことを心配しているとお母さんが教えてくれた。ぼくは気になっておじいちゃんに聞いてみることにした。すると、
「ひさしぶりの開さいでお客さんが集まってくれるか心ぱいなのよ。四百年も続く加治木のくも合せんを、いつまでものこしていきたいのよね。今年も少しでも多くの人に来てほしいんだけど、ひさしぶりだからみんな来てくれるかな。あおとくん、出てくれるけ。」
と、いつも元気なおじいちゃんが、くも合せんのポスターを見ながら小さい声で聞いてきた。
「今度の日よう日のくもとりツアー、ぼくも行くね。」
ぼくはとっさに言っていた。さい近はコガネグモが近くにいなくなったので、一日かけて遠くまでくもをとりに行くツアーをしてくれている。これも保ぞん会の方々の仕ごとらしい。

日よう日になった。バスにのって遠い山おくまで来た。バスからおりると保ぞん会の方々はくもの習性やとり方をやさしくおしえてくれた。いっしょになって野山をかけめぐり、どろだらけになりながら何とかくもをつかまえることができた。

帰りのバスでは、子どもたちはつかれてみんなねている。そんな中、前に座っているおじいちゃんと保ぞん会の方が話をしていた。
「どげんしたら今年の大会にたくさんの人が来てくるっかね。心ぱいやっどね。」
「よし、もう一回パンフレットをくばっど。でくっことを、できいかぎいすっが。」
おじいちゃんたちは、長い間話し続けていた。ぼくはおじいちゃんたちの気持ちがものすごくわかるようで話が気になってねることができなかった。

家に帰りつくと、おじいちゃんは自分のくものお世話をしていた。
「ぼく、今年はいいくもがとれたから、ゆうしょうねらえそうだよ。」
と言うと、おじいちゃんはぼくの方を見てうなずきながらうれしそうに
「あおとが出てくれるのが、おじいちゃんは一番うれしいがよ。」
と笑いながら言ってくれた。それを見たぼくは自然と言っていた。
「おじいちゃんありがとう。ぼくもくも合せんがんばるね。」

くも合せん当日、身を乗り出して食い入るようにたたかいを見る子どもたち。大きなかん声の中、たたかうくもや参加者たち。会場はたくさんの人であふれかえっていた。ぶたいの中心には、いきいきとした笑顔で行司をしているおじいちゃんがいた。
たくさんの人々のあふれるぐらいいっぱいのおもいがつまった加治木のくも合せんが今年も始まった。